

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：32654

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24700660

研究課題名(和文) 李想白が我が国のバスケットボール界に果たした役割に関する史的研究

研究課題名(英文) Research on the Role Sang-Beck Lee Played on Japanese Basketball

研究代表者

及川 佑介(OIKAWA, Yusuke)

東京女子体育大学・体育学部・講師

研究者番号：80592451

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円、(間接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)： 李想白の活動は組織的関与と技術的関与に別けてみる事が出来る。彼は大日本バスケットボール協会を1930年に設立し、その運営の中心を担い、李想白の組織的関与は多岐に及んでいた。彼の技術的関与は、自チームの指導のほか、『指導籠球の理論と実際』(1930)、協会の機関誌『籠球』などの執筆活動を通して技術や戦術の紹介を行っていた。李想白は先のことを見据えながら活動していたことがわかる。そして、彼の組織的関与と技術的関与により、当時の我が国の発展はなるべきしてなったと考えられる。しかし、競技的なバスケットボールが急速に広まった裏には、遊戯的なバスケットボールの姿が薄れて行ったことを忘れてはならない。

研究成果の概要(英文)： Sang-Beck Lee's activities can be divided into institutional involvements and technical involvements. He established JBA (Japan Basketball Association) in 1930 and also in steering it, which included many institutional involvements. His technical involvements besides the leadership of his own team include his book, The Theory and Practice of Basketball Instruction (1930), and writing articles on the journal of the association, Basketball, through which introduced the technology and tactics of basketball. While looking into his activities, it is clear that he worked in anticipation of the future things. It is conceivable that due to his institutional involvements and technical involvements, the development of our country's basketball had become the way it should be. However, we should not forget that because of the rapid spread of athletic basketball, the presence of playful basketball is fading.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学

キーワード：李想白 成瀬仁蔵 大森兵蔵 大日本バスケットボール協会 『指導籠球の理論と実際』(1930) Jack Gardner 遊戯的なバスケットボール 競技的なバスケットボール

1. 研究開始当初の背景

戦後、母国である韓国においてIOC委員をはじめとする各種の要職を務めた李想白は、1966年4月14日にソウルの病院で心筋梗塞のため死去した。その直後、日本政府は彼に対し勳3等旭日章を授与し、彼の功績を称えた。なお、彼は1940年12月にも、大日本バスケットボール協会が行った創立10周年記念式典で功労者として表彰された。これらのことは、何故、どのような業績に対してなされたのであろうか。

その答えは、例えば牧山圭秀の「バスケットボールの技術史」(『スポーツの技術史』所収、1972)や日本バスケットボール協会50年史『バスケットボールの歩み』(1981)、早稲田大学バスケットボール部60年史『RDR60』(1983)によって示されているように、昭和初期のバスケットボール界における李想白の功績に対する評価によるものであった。しかし、これらの文献では、李想白に関しては主として思い出話しによるところが多く、資料的裏付けは充分なされていない。

2. 研究の目的

申請者は、「李想白が我が国のバスケットボール界に果たした役割に関する史的研究」というテーマで研究を行う。我が国のバスケットボール界は、1930年に大日本バスケットボール協会を設立させた。その後も発展は続き、バスケットボールがオリンピックの正式種目になった1936年のオリンピック・ベルリン大会に出場するほどまでの隆盛をみせた。こうした時期に、李想白は我が国のバスケットボールを組織的、技術的に進歩させた中心的な人物であり、彼が著した『指導籠球の理論と実際』(1930)は当時のバイブル的存在として技術向上に寄与したという。そこで、本研究では黎明期における我が国バスケットボール史研究の一端を明らかにするため、李想白が担っていた役割を考察する。

3. 研究の方法

本研究では、我が国のバスケットボールにお

いて李想白の技術的関与と組織的関与に分けて検討していく。主な資料は、『指導籠球の理論と実際』(1930)や「コーチの類型と進化」(『籠球研究』所収、1935)、Allen Forrest, “Mr. President and Member’s of the National Association of Basketball Coaches” (1935)、やAllen Forrest, “The Olympic Committee on Basketball. Mr. President” (1935)、である。

4. 研究成果

. はじめに

本研究では黎明期における我が国バスケットボール史研究の一端を明らかにするため、李想白が担っていた役割を考察した。1930年に李想白らが大日本バスケットボール協会を設立したことで、日本バスケットボール界における彼の役割は鮮明になり、活発化していった。以下では李想白の活動を技術的関与と組織的関与に分け、簡単ではあるが記すこととする。

. 技術的関与

-1. 『指導籠球の理論と実際』(1930年)

李想白は大日本バスケットボール協会を設立させて競技力の向上を図るとともに、バスケットボールの宣伝・普及活動に尽力していたと考えられる。そして、彼の主著『指導籠球の理論と実際』(1930年)には、そうした意味合いも込められていたといえる。

当時のバスケットボール界では指導者が不足しており、大都市より指導者を招くことは少なかったようであるが、指導者を招聘するにも、多額の費用を要していたという。周知の通り、『指導籠球の理論と実際』は、バスケットボールの指導書であった。李想白の言葉を借りると「技術に対する正しい認識」をするための書、つまり、そこで意図することは、指導者の不足を解消するために、指導者の育成・競技力の向上を示唆していたと考えられる。全619ページにわたる書の中で、技術・戦術について費やされたページは435ページにもなっていた。

バスケットボールの専門書が決して多いとは

いえない時期に出版された李想白の『指導籠球の理論と実際』は昭和初期においてバイブル的存在であったという。そのように、捉えられた理由として、李想白は当時の技術・戦術の「中庸の説」を記したことにあったと考えられる。

-2. システムプレーの導入

大日本バスケットボール協会は、1933年にアメリカからジャック・ガードナー (Jack Gardner) を招聘して、全国各地で約一カ月に渡り講習会を開催している。これが、ガードナー講習会といわれ、この講習会を開催したことで、バスケットボールの戦術を系統的に考えることが一般的になり、システムプレーという戦術を取り入れることの必要性が全国的に広まった。

ガードナー講習会(1933年)によって日本にもたらされた「バリーシステム」はシステムプレー導入のきっかけとなった。しかし、我が国の競技者は基礎技術の水準が低く、ドリブル技術やパス技術を応用的に用いる局面の多い「バリーシステム」を定着させることは出来なかった。そうした時期に、「8の字連続移行法」というほとんどドリブル技術を使うことなく、コート上に8の字を描くように競技者の動きを単純化した戦術を取り入れたことが、システムプレーを定着させた一つの要因となった。

昭和初期におけるバスケットボールの戦術の習熟過程をシステム化という視点から捉えると以下のような三つの時期に分けて考えることが出来る。大日本バスケットボール協会は、1930年に『指導籠球の理論と実際』を出版したことで技術的な方向性を示し、1933年のガードナー講習会では戦術のシステム化を広く宣伝した。そして、戦術のシステム化を発展・定着させようとしながら、1936年のオリンピック・ベルリン大会に向かっていた。

-3. コーチの類型と進化

ここでは1935年における李想白の「コーチの類型と進化」に記されている内容を基準として、フォーメーション、セットプレー、システム、のバスケットボール用語の意味を次のように整理した。

フォーメーションとは、複数人の決められた動きを表した戦術の一局面のことであり、セットプレーとは、フォーメーションに基礎技術の知識を加味した戦術のことである。そして、システムとは、基礎技術とセットプレーの混合であり、プレーとプレーとの連続性がある戦術を意味する。つまり、フォーメーションとセットプレーは、チーム戦術の一局面のことで、システムとは一つひとつの局面を総合したものであり、局面間を連続し得るチーム戦術のことを指すである。「コーチの類型と進化」では、フォーメーションやセットプレーという局面における戦術が連結することでシステムとなり、システムに速攻法(奔放型)が加わると科学的プレーへと戦術が成熟していくことを段階的に記されていた。李想白は、コーチの類型における成熟段階を示しながら、日本バスケットボール界のチーム戦術の移り変わり競技水準との関係、及び今後の技術・戦術の方向性を次のように感じていたと考えられる。大正期では主にフォーメーションを用いるバスケットボールを会得し、昭和期に入り基礎技術の重要性に気付き、それをチーム戦術で活かそうとしたことでセットプレーを習得する。そして、1930年には個人の能力を尊重した戦術として速攻法が用いられたことでドリブル技術の認識が変化する。1933年には、プレーとプレーとの連結を必要としたことでシステムプレーが一般的に用いられはじめ、昭和11年のオリンピック・ベルリン大会で日本チームは、システムプレーを武器としてはじめての世界大会へ挑んだ。さらなる技術的向上を目指し、速攻法とシステムプレーを組み合わせ、自由自在にプレーが連続していく攻撃法として科学的プレーを取り入れようとしていたのである。

・ 組織的関与

-1. 大日本バスケットボール協会の設立

早稲田大学バスケットボール部は浅野延秋が1934年に立ち上げたバスケットボール同好会がもとになり、1923年に部として認められている。李想白は同好会の中からバスケットボールにかかわっていた。浅野延秋が同好会を創るとい

つかのバスケットボールの同好会が出来、1922年5月には同好会を結集させて第2回全日本選手権大会ジュニアの部に出場した。さらに、同年、学校の体操の授業でバスケットボールが行われた。これらは、全て1920年から1922年までに行われ、急速に組織化されたことがわかる。そして、翌年の1922年に同好会は部として認められると、その年に早稲田大学、立教大学、東京商科大学の学生連合を創り、翌年には全日本籠球学生連合を設立している。

1930年9月30日午後5時30分に東京YMCAで大日本バスケットボール協会の設立総会が開かれた。出席者は9名の発起人(李想白、富田毅郎、浅野延秋、田中寛次郎、野村瞳、松崎一雄、小林豊、妹尾堅吉、鈴木重武)を含む約40名であった。李想白は別室に当総会で設立を決議して直ちに発表するため新聞記者を呼んでいた。しかし、総会に呼んでいない大日本体育協会がバスケットボールの運営を任されていた薬師寺尊正が協会設立に反対のために現れ、総会から退室させるということがあった。さらに、東京近郊の大学出身者のみで日本を統括する組織を創ったことを非難する声もあった。

そうした中で大日本バスケットボール協会は設立され、1930年10月1日正午に東京YMCAで設立の声明を出した。組織図的には、大日本体育協会の下に大日本バスケットボール協会が創れたが、大日本体育協会の薬師寺尊正が反対した要因は、日本のバスケットボールの運営等が大日本体育協会から大日本バスケットボール協会に移管されたことにあると考えられる。

-2. オリンピック正式種目決定に関する李想白とForrest C. Allen

バスケットボールをオリンピック種目にする運動はアメリカからはじめられた。それは「全米バスケットボールコーチ協会」(以下、「NABC」と表記)の主導で行われた。NABCは1927年に創立され、初代会長は1929年までForrest C. Allenであった。彼はカンザス大学バスケットボールチームのヘッドコーチを

務め、同大学体育局長と体育学科主任を兼任した人物であった。NABCの中にオリンピック準備委員会が設けられ、その委員長もForrest C. Allenであった。

Forrest C. Allenのバスケットボールをオリンピック種目にしようという意向を支持したのが李想白であった。

1931年の李想白の論稿(『籠球』掲載)によれば、アメリカのNABCのオリンピック準備委員会は、1932年のオリンピック・ロサンゼルス大会でバスケットボールを正式種目として取り入れさせようとする活動を1929年頃から行っていた。

李想白は大日本バスケットボール協会が創立された1930年以前から、バスケットボールがオリンピックの正式種目になることへ関心を抱いていた。そして、日本に協会が創立したことで、日本もアメリカのオリンピック準備委員会の活動へ参加することになる。そのことを日本で任されたのが李想白であり、大日本バスケットボール協会がNABCのオリンピック準備委員会を助成することになっていた。

ロサンゼルス大会(1932)でバスケットボールを正式種目にさせることは、バスケットボールの歴史が浅いことなどの理由により実現しなかった。それでも、アレンらオリンピック準備委員会は、デモンストレーション種目としてバスケットボールをロサンゼルス大会で行うことを企てている。その時のことを、アレンは次のように述べている。「メキシコ、カナダ、フィリピンと日本は、もしロスアンゼルス組織委員会がバスケットボールをデモンストレーションとして行うならば、それに参加するチームをロスアンゼルスへ送るとはっきり約束しました(書簡A)。つまり、日本では協会を創立(1930)して間もない時期であったにもかかわらず、ロサンゼルスに選手団を送る体制がある程度整っていたと考えられる。しかし、アレンらオリ

ンピック準備委員会の努力は結局実を結ぶことはなく、ロサンゼルス大会でのバスケットボール競技は、デモンストレーション種目としても行われることはなかった。

李想白は、大日本体育協会の本部役員としてロサンゼルス大会（1932）に参加したが、出発する前にアメリカバスケットボール界の「権威者数名」へ書簡を送っていた。それは、ロサンゼルスで会合を開きたいという内容の書簡であった。その時に返事をくれたのがアレンであった。これを現地で受け取った李想白は、直ちにアレンと時間を打ち合わせ、1932年8月10日にロサンゼルスで会合を開いている。

こうした李想白らの活動には、1940年に開催されようとしていた第12回オリンピック・東京大会において、バスケットボール競技を行うという目的があったこと、そして、彼らは献身的に国外のバスケットボール関係者と関わりを持ち、同時に日本のバスケットボールを国外に知らせようとしていた。

オリンピック・ベルリン大会でバスケットボールが正式種目として決定した後に、李想白は日本のバスケットボールチームがオリンピックに参加する意志をアレンへ伝えていた。

アレンの書簡の中で、李想白や日本に関する記述が多く見受けられるのは、李想白ら大日本バスケットボール協会の行ったことが、恐らく他国のバスケットボール関係者よりも印象深かったからであろう。それだけに李想白ら大日本バスケットボール協会は、バスケットボールのオリンピック大会正式種目になる経緯で、アレンと関わりを持っていたといえる。また、こうした国際的に活動を行っていたことから李想白ら日本のバスケットボール関係者は、世界のバスケットボールへ視野を広げていたと考えられる。そこには、オリンピック・ベルリン大会の次大会のオリンピック・東京大会（1940年）が控えていたから

であるといえる。

-3. 日本バスケットボール史における遊戯性と競技性(1924年～1930年)

我が国のバスケットボールは、成瀬仁蔵によって1894年に梅花女学校で紹介され、1901年に成瀬仁蔵の移動にともない日本女子大学校へ導入された。それは同校の運動会プログラムにみられるように、「日本式バスケットボール」とも呼ばれ、学校教育の教材の一部として利用された。成瀬仁蔵が日本に伝えたバスケットボールは、女学校等の学校教育の教材として広まったことが関係したのか、我が国のバスケットボール史で遊戯的なバスケットボールと位置付けている。

この流れとは別に、1908年に大森兵蔵によって、競技的なバスケットボールが東京YMCAに紹介された。それが大正期に入ると、Franklin H. BrownがYMCAを中心にバスケットボールの指導をしたこともあり、徐々に競技力を高め、対抗(校)競技が行われるようになった。

そして、1917年に大日本体育協会が芝浦で行った第3回極東選手権競技大会に出場することになったが、当時はYMCAのバスケットボールチームが漸く編成された時期であったことから代表チームを派遣出来るような状態ではなかった。この大会のバスケットボール種目には中華民国、フィリピン、日本の3カ国が参加したが、日本は全敗に終わり最下位であった。大日本バスケットボール協会が創設された1930年までは、我が国でのバスケットボールの大会を大日本体育協会が主催していた。

大正期に極東地区でも最下位だった我が国のバスケットボールは、昭和期に入ると徐々に力をつけた。例えば、1930年の第9回極東選手権競技・東京大会では、中華民国に2勝、フィリピンに1勝して日本は2位となり、はじめて国際大会で勝利し、1936年にドイツで行われた第11回オリンピック・ベルリン大会では3位に入賞したメキシコに善戦することが出来た。

以上のように、明治期に遊戯的なバスケットボ

ールとして広まったバスケットボールは大正期から競技的要素が強まっていった。

・おわりに

李想白の活動は技術的関与と組織的関与に別けてみる事が出来る。彼らは前体制に反発する形で大日本バスケットボール協会を1930年に設立した。大日本バスケットボール協会には、規則委員、審判委員、競技委員、編纂委員があり、李想白は規則委員の主任と編纂委員を務めていた。審判委員と競技委員に彼の名前はないが、彼は1936年に開催されたオリンピック・ベルリン大会で我が国初めての国際審判員として活躍し、日本代表クラスの指導にも関わっていたことを考えると大日本バスケットボール協会の運営のほとんどを担っていたといえる。さらに、オリンピックでバスケットボールが正式種目になるための活動、海外のバスケットボール関係者との関わりなど、李想白の組織的関与は多岐に及んでいた。

彼の技術的関与は、当時のバイブル的存在であった『指導籠球の理論と実際』(1930)をはじめ、大日本バスケットボール協会の機関誌『籠球』、大日本体育協会の機関誌『アスレックス』、『オリムピック』など、数々の執筆活動を通して、技術や戦術の紹介を行っていたことが挙げられる。その他、自チームでのバスケットボールの指導、1933年には李想白ら大日本バスケットボール協会がアメリカからJack Gardnerを招聘し、約1か月に渡り全国で講習会を開催してシステムプレーという戦術を広く知らせるなどしていた。

李想白の活動をみると先のことを見据えていたことがわかる。例えば、彼が著した「コーチの類型と進化」(『籠球研究(第7号)』1935)で彼は常に技術・戦術の過去と現在を踏まえた上で、未来のことを記している。このように、彼の組織的関与と技術的関与により、当時の我が国の発展はなるべきでなくなったと考えられる。しかし、李想白らが日本のバスケットボール界を急速に組織化し、競技化を進めた裏には、遊戯的なバスケットボールの姿が消えて行ったことは忘れては

ならない史実といえよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計5件)

- ・ 「スポーツ資料収集家・田尾栄一に関する一考察」スポーツ史学会第27回大会(東洋大学)。
- ・ 「日本バスケットボール史における遊戯性と競技性に関する一考察(大正13年~昭和5年)」日本体育学会第64回大会(立命館大学びわこ・くさつキャンパス)。
- ・ 「バスケットボールのオリンピック正式種目決定に関する李想白とForrest C. Allen」東北アジア体育・スポーツ史学会第10回記念大会(札幌市定山溪ビューホテル)。
- ・ 「大日本バスケットボール協会の設立に関する史的考察 李想白を基軸として(昭和5年)」東京体育学会第4回学会大会(国土館大学世田谷キャンパス)。
- ・ 「バスケットボールの指導者の類型に関する一考察(大正末期~昭和初期) 李想白の小論を基軸として」日本体育学会(東海大学)。

〔図書〕(計0件)

〔その他〕

<自らのホームページ>

<http://oikawa.matrix.jp/>

<講演>

- ・ 「李相白と松本幸雄からみる昭和初期のバスケットボール史」高千穂大学総合科目B。

6. 研究組織

(1)研究代表者: 及川佑介(OIKAWA Yusuke)

東京女子体育大学、体育学部、講師

研究者番号: 80592451

(2)研究分担者: なし

(3)連携研究者: なし